

ある夏の夕しな、猿爪村でいっちゃんの働きもんの男が、隣村での仕事をしまいにして吹越まで来た時やった。黒うなっておった空から雨が、ポツリポツリと降り始めた。雨はじっきにザアッと大雨になった。ほんだもんで男は近くにあった杉の巨木で雨宿りをしようと思つた。木にもたれかかるとるがさ〜と、木の周りにゃ何ともいえんええ香りが漂っていて、いつの間にかそのまんま眠ってしまった。目が覚めた時、どうやら小半刻程(1時間くらい)たつとつたらしい。男は夢ん中で杉の皮が入つてる布団で気持ちよ一寝とる赤ん坊の安らかな寝姿を見たげな。いつの間にか雨はすっかり上がって、時たま葉っぱから落ちるしずくが月の光できれいに輝いとつた。

男は家に帰って晩飯時、自分の家族にこの話しをするがさあと、なんでか分からんけんど、その晩げは家じゅうのもんが、ぐっすり寝入ることができたげな。

その後、誰言うともなく、この杉の皮が夜泣きする赤子にええらしいしという話しになった。実際、寝しまいになつても泣いてぐずる子に、この杉の皮を細こう剥いで入れた枕をつくって、そいつを頭にかわせるがさあと、いつも夜泣きする赤子が不思議なことにその晩からすやすや寝たという。また、夜中、急に泣き出す赤子には、かねて用意しておいた杉の皮に火をともおて赤子に見せるがさあと、今まで泣いとつた赤子が急に泣き止み、心地よさそうにすやすやと寝入つたそう。

そして、この杉の皮が夜泣きする赤子によ一効くちゆうことで、杉の木に「寝入りが杉」という名前がついたそう。この話しはこの辺の村だけじゃのうて、かなりの遠方まで伝わり、どーらーたんとの人が杉の皮を取りに来たそうや。

杉は、どーらーいかあ木で、大人が三抱えもある大木であつたが、そのうち半分は雷で黒焦げになり、半分は皮を剥がれて裸んぼで、ちーと衰れな姿になつてしもうたげな。

大正の頃になると、道路の改良が行われこの巨木は切り倒されて、古株は道路の下に埋められてしまつた。現在の「サニーヒルズ」の門の下辺りにあつたそう。

